

「マリー・ロジェの謎」の謎

鷺 津 浩 子

エドガー・アラン・ポウのC・オーギュスト・デュパン三部作のうちの第二作「マリー・ロジェの謎」¹⁾は、他の二作品「モルグ街の殺人」「盗まれた手紙」に比べると、十全な評価を受けているとはいえない。たとえば、ハワード・ヘイクラフトは『娯楽のための殺人』で、この作品が「詳細に研究するにはもっとも値しないもの」であり「物語というよりはエッセイ」であるとしている²⁾。半世紀後、フランクコン・C・ルイスは「織を解きながら」でデュパンものを扱いながらも、「マリー・ロジェの謎」をはずして論を進めている³⁾。『犯罪乗合馬車』のドロシイ・セイヤーズによる序文、および「擁護」という副題を持つリチャード・P・ベントンの論文は、この作品に好意的な評価を下している点で例外的といえるだろう⁴⁾。けれども、このいずれも、この作品が他の二作品とは違った意味での推理小説であることを指摘してはいても、それを十分に論証しているとはいえない。これまでのところ、推理小説としての評価は高いものではないのである。

もちろん、「マリー・ロジェの謎」の評価には、もうひとつの側面があることも忘れてはならないだろう。仮に実話小説としての評価と呼ぶことにするこの側面は、この作品が1841年にニューヨークで起きたメアリー・セシリア・ロジャース殺人事件を基にしていることから、この現実の事件と虚構の作品とを比較するものとなっている。たとえば、ウィリアム・クルツ・ウィムザット・ジュニアは「ポウとメアリー・ロジャースの謎」と題した論文で、当時の新聞・雑誌から事件を再構築し、ポウの論理の誤謬を指摘している⁵⁾。ジョン・ウォルシュの『探偵ポウ』はこの路線を踏襲し、現実のメアリー・ロジャース事件に合うようにポウが自作に加筆訂正を加えた過程を再現している⁶⁾。実話小説としての評価を更に押し進めれば、アーヴィング・ウォレスの『伝説の原型』となるだろう。ウォレスはポウのマリー・ロジェという「伝説」からその

「原型」すなわち現実のメアリー・ロジャースを再構成しようとしている⁷⁾。あるいは、レイモンド・ポールの『誰がメアリー・ロジャースを殺したか』をあげてもいいだろう。「マリー・ロジェの謎」の真犯人に納得がいかないポールは、メアリー・ロジャース殺人事件の真犯人を指摘している⁸⁾。ここにいたって、現実から生まれた虚構は、もとの現実を再構築する方向を示唆することになる。だとすれば、「マリー・ロジェの謎」は、はたして現実のメアリー・ロジャース事件を基にした「実話」小説と呼べるのだろうか。

本稿は、「マリー・ロジェの謎」における「実話」の再検討から始め、その「実話」を構成している「神話」を指摘することによって、この作品を再読しようとする試みである。

I

「マリー・ロジェの謎」には、現実のメアリー・ロジャース事件に対する二つの方向が存在している。すなわち、それから離れようとする方向とそれに近づこうとする方向である。このうち前者は主に本文中に、後者は主に注釈に見られる。

現実の事件から離れようとする方向は、作品冒頭からすでに明らかである。ノヴァーリスの引用からなる題辞は、実際の出来事と観念上の出来事がめったに一致しないことを述べたものであるし、書き出しのパラグラフは暗合について述べたものだからだ。この方向は、続く第二パラグラフでさらに押し進められる。マリー・ロジェ事件はメアリー・ロジャース事件よりも時間的に先行しているとされているのだ。前者が後者の模倣なのではなく、その逆、後者が前者と偶然に一致しているのだ。こうして、パリの事件は現実のニューヨークの事件から離れ、あたかもそれ自体が実話であり、後の事件と偶然にも一致する先例となっているように描かれることになる。

ところで、この同じ第二パラグラフにつけられた注釈は、現実の事件から一度引き離されたマリー・ロジェ事件をもう一度現実の事件に近づけるものとなっている。発表当時には不要と思われたメアリー・ロジャース事件との呼応関係に言及する必要を述べたあとで、じつはこの作品の目的が「事実の考察」であったと明かされるのだ。けれども、この注釈が後から書き加えられたものであることを忘れてはならないだろう。

本文の発表は1842年11月、12月と1843年2月の『スノーデンズ・レディズ・コンパニオン』誌、注釈つきでの発表は1845年6月短編集『テイルズ』に収録されたときである。ウォルシュの綿密な調査によれば、ポウは42年末から43年初めにかけてメアリー・ロジャース事件の新展開に見合うように第三回雑誌掲載分に加筆訂正をほどこしている⁹⁾。だとすれば、それ以降に書き加えられた注釈がニューヨークの事件に歩み寄る形になっていたとしても不思議ではないだろう。本文の冒頭が現実の事件から離れるように書かれているのに対して、後で書き加えられた注釈は現実の事件に近づくように書かれているのである¹⁰⁾。

こういった現実の事件との関係はまた、マリー・ロジェの紹介をしているパラグラフにも見られる。本文では、事件がモルグ街の惨劇の約2年後に起きたことを述べたあとで、マリーの姓と洗礼名が「不運な『葉巻売りの娘』」に似ているため注意を引くとして、マリーの個人史をまとめている。ここでの語り手は、第三パラグラフの終わりで彼自身が言っていたように、あくまでもニューヨークの事件との類似のために以前のバリの事件を思い出したのだという態度を崩していない。けれども、注釈がこの話を現実の事件に引き戻す。マリー母娘が住んでいた街の名前、娘の雇主の名前に呼応するメアリー・ロジャースの事実があかされているのだ。こうして、「マリー・ロジェの謎」における現実と虚構との奇妙な関係が生まれる。メアリー・ロジャース事件という現実の事件から出発した虚構のマリー・ロジェ事件は、あたかもそれが先行する事件のような体裁を取りながらも、注釈によって実話の存在を確認されていくのだ。

けれども、実話の存在を確認するという役割を負った注釈すべてが現実を示唆しているという保証はない。というよりはむしろ、事実との呼応関係を指摘したところ以外は、疑ってみる必要があるだろう。注釈1はマリー・ロジェ事件がメアリー・ロジャース事件に基づいていることを述べたものだが、その創作が「惨劇の現場から離れたところで」なされ「調査の手段としては手に入る新聞しかなかった」としているのは、ウォルシュによれば、明らかな嘘である¹¹⁾。だが、問題はこの注釈が嘘であるかどうかではない。問題は、この注釈によって、本文があたかも新聞だけを資料として書かれたかのようにされていることなのだ。そして、新聞は現実の事件について書いたものであっても、現実の事件その

ものではない。新聞を資料にしたときから、現実の事件はすでに抜け落ちていくのだ。

注釈15は、ランダーからの引用となっている。本文中でデュパンが「承認され『本に書かれた』原則に従うことによって個々の誤りが生み出される」と語っている部分に付されたこの注釈には、何の説明も加えられていない。もちろん、「分類の『原則』への盲目的な献身によってもたらされる誤謬」について述べているこの注釈を、本文で語られている内容の補足説明と読むことも可能だ。けれども、注釈1で調査の手段が新聞しかなかったとしていることを想起すれば、違った読みも可能だろう。デュパンの台詞はそのままデュパン自身の「推理」に対する批判ともなりえる。デュパンもまた、承認され新聞に書かれた原則に従うことによって、誤りを生み出すかもしれないのだ。したがって、注釈15は次のように始まる。「理論を展開するとき、目的の質に基礎を置くならば、その目的自体にそった展開はできない。話題を配置するとき、原因を基に配置するならば、その原因を結果に照らし合わせて評価することはできない」(747)。こうして現実の事件に近づける働きをしているのかのように見えた注釈は、かえってその実話から遠ざかっていく可能性を示唆するものとなる。

注釈の実話性にもっとも疑問を投げかけるのは最後の注釈、すなわち本文中に鉤括弧によって挿入された注意書きの最後「編集部」に付された注釈である。注釈23によれば、この「編集部」は「マリー・ロジェの謎」初出誌の編集部となっている。けれども、追跡調査の省略を宣言しているパラグラフはポウ自身の創作であり、初出誌の編集部ではありえない¹²⁾。したがって、最後の注釈はマリー・ロジェ事件を実話に近づけるどころか、それ自体が虚構であることになる。

以上のことから、「マリー・ロジェの謎」における現実と虚構の関係が一筋縄ではいかないことがわかっていく。メアリー・ロジャース事件という現実の事件から離れる形で出発した虚構のマリー・ロジェ事件は、注釈による事実確認によって現実の事件に引き戻される。けれども、注釈すべてが事実確認に当たっているのではない。いくつかの注釈には現実性を疑問視させる仕掛けがほどこされているのだ。だとすれば、「マリー・ロジェの謎」における実話はどれだけ信用できるのだろうか。あるいは、実話はどこに存在しているのだろうか。

こういった現実と虚構の関係をさらに複雑にしているのが、本文中に挿入されている新聞記事である。デュパンはマリー・ロジェ事件の一次資料をまったく利用していない。現場におもむくこともなければ、関係者の話を聞くこともない。推理の依頼をもたらしたG——総監の話ですら、聞いていない。長時間にわたる総監の見解披瀝や証拠についての注釈のあいだ、「緑色の眼鏡」の陰で眠っている。彼が推理の基盤としていのは、事件についての新聞記事にほかならない。こうして、デュパンの推理はマリー・ロジェ事件そのものについての解釈ではなく、事件を報道した新聞記事についての解釈となる。

ところで、これらの新聞記事は、ウィムザットの原典確認によってメアリー・ロジャース事件当時のものであるとされている¹³⁾。だとすれば、デュパンの推理は、メアリー・ロジャース事件について報道した当時の新聞記事の「読み」の問題となるだろう。けれども、この新聞記事自体もまた、事件の解釈であることを忘れてはならない。「マリー・ロジェの謎」における「実話」メアリー・ロジャース事件は、すでに新聞によって解釈され書かれたものなのであり、デュパンの推理はその解釈の解釈となっているのだ。したがって、注釈で明らかにされている新聞記事の出典は、すこしも「マリー・ロジェの謎」の実話性を保証するものではなくなる。むしろ、デュパンの「読み」の対象が、現実の事件そのものではなく、新聞記事による事件の「読み」であることを示していることになる。

そこで、次の項では、デュパンの「読み」の直接の対象を検討してみることしよう。すなわち、当時の新聞がメアリー・ロジャース事件をどう扱ったのか、どのような視点・姿勢からこの事件を報道しているのかということである。

II

メアリー・ロジャース殺人事件がおきた1841年、この事件を大きく取り上げたのは1830年代に登場した大衆紙だった。

それ以前の商業新聞や政党新聞が年間購読契約による宅配であったのに対して、この大衆紙は1セント、通称「ペニー・プレス」と呼ばれ、日刊の街売りを基本としていた。こういった大衆紙が台頭する背景には、その読者層となる中産階級の台頭がある。そして、この中産階級の台頭

を可能にした技術革新はまた、大衆紙の日刊化を可能にする印刷機を生み出した¹⁴⁾。こうした読者層と日刊街売りという販売形態を持つ大衆紙が売り物にしたのが、犯罪物だった。ことに、ニューヨークの『サン』(1833年9月3日、ベンジャミン・H・デイ編集)と『ヘラルド』(1835年5月6日、ジェイムズ・ゴードン・ベネット編集)の犯罪をとりあげたコラムは評判となり、ついには1845年に犯罪物専門の週刊誌『ナショナル・ポリス・ガゼット』(イーノック・キャンブとジョージ・ウィルクス編集)が創刊されるにいたる¹⁵⁾。ベニー・プレスの報道の原則は大衆の利益を守ることであり、その報道方針は大衆受けをねらうことだった¹⁶⁾。この原則と方針に、犯罪物はまさにうってつけだったのである。

はたして『ヘラルド』の売上は、1836年におきたエレン・ジュウエット殺人事件を契機にして急激に伸びている¹⁷⁾。この時に使われた殺人事件報道のノウハウは、その後の殺人報道にも受け継がれ、5年後のメアリー・ロジャース殺人事件報道にも使われている。そこで、メアリー・ロジャース事件についての報道を論じる前に、エレン・ジュウエット事件の場合を概観してみよう。

エレン (またはヘレン)・ジュウエットの本名ドーカス・ドランス (またはドーエン)、メイン州オーガスタ生まれ。ニューヨーク・トマス街にあるロジーナ・タウンゼンドの高級売春宿で、1836年4月10日日曜日の夜、手斧で頭を割られて放火された死体となって発見されている。女性被害者をおしなべて「美人」と形容する報道の決まり文句¹⁸⁾を割り引いても、エレンが有名な高級娼婦であったことには間違いがない。容疑者は、直前にエレンを「訪問していた」リチャード・P・ロビンソン、別名フランク・リヴァース、当時の遊び人のひとりである。このセックスと悲劇が結びついた事件は、ベニー・プレスことに『ヘラルド』によって派手に報道され、巷間を賑わすことになった。

事件の翌11日、『ヘラルド』は見出し記事でこの「もっとも残虐な殺人」を報道した¹⁹⁾。容疑者を有罪とみなしたこの記事は、ロビンソンを「黒」「悪人」と決めつけ、エレンを美貌と才能がありながらも墮落したかわいそうな女性としている。事件は、恐ろしい悲劇であると同時に、遊び人や娼婦の「墮落」について道徳的教訓を提供するものとなっているのだ。この事件の続報として掲載された現場訪問記では、エレンの部屋の様子、どんな服をもっていたか、どんな本や雑誌を読んでいたかといっ

たことが紹介され、エレンの死体が大理石の彫像「メディチのヴィーナス」に似ていたと描写されている（この現場訪問記は『ヘラルド』の独占記事であり、死体を描写したことで編集者兼記者ベネットは「腐肉を食うハゲタカ」と非難されてることになる²⁰⁾）。ベネットはまた、エレンが「墮落」へ至る道を再現してみせる。16歳のときに誘惑されたエレンは、「情熱の瞬間に、貞操と道徳という規律をすべて捨ててしまった」のだ。

だが、翌13日の二度目の現場訪問記から、報道のトーンが変わってくる。探偵役を自らかってでたベネットは、この犯罪が「女性的」であると主張しはじめるのだ。これまで道徳的にまったく申し分のなかったロビンソンのような青年が犯人であるわけがない、むしろエレンの人気を妬んだ女性の嫉妬心が企てた陰謀なのではないか。そして、ベネットは娼婦宿の女将ロジーナが真犯人であると暗示する。こうして、アメリカ初のインタビュー記事が16日に掲載されることになる²¹⁾。だが、この記事が記者の偏見を反映したものとなっていることを見落としてはならないだろう。ベネットはインタビュー後の分析でこの女将の悪評を紹介し、証言者として信用できない印象を読者に植えつけようとしている。

ロビンソン無罪を主張する『ヘラルド』と有罪を主張する『サン』の加熱した裁判報道のあとで、6月8日ロビンソンは無罪判決を得る。結局、エレン殺害の真犯人が逮捕されないまま、この事件は決着を見ている。

こうした『ヘラルド』の事件報道から、当時の性をめぐる図式が浮かび上がってくるだろう。美貌と才能に恵まれた敬虔で貞淑な少女が、誘惑によって墮落し、売春婦に身を落とす。彼女の人生は転落の人生だ。この娼婦のもとに通ってくるのが小金を持った遊び人だが、この件に関して彼が道徳的に責められることはない。それどころか、彼は流行の最先端を行く「スポーティング・マン」あるいは「パワリー・ボーイ」で、劇場や下宿屋や売春宿を舞台に女たちと戯れることには何の抵抗もなかった²²⁾。

この図式の背景には、当時の女性観がある。ナンシー・F・コットが「家庭性の神話」と呼ぶこの女性観は、女性の職能を家庭内のもの（「家庭性」）と規定し、その社会的職能も「家庭」の延長である国「家」にとって有用な息子の養育と規定するものであった²³⁾。このために、女性（ことに中流以上の女性）に家庭を守る貞淑さを求めることになり、女性

には性衝動がないとする論も生まれた²⁴⁾。この「家庭性」と表裏一体の関係にあるのが「墮落した女」である。つまり、一方に貞淑で道徳的な家庭婦人、他方にこの規範からはずれ墮落した奔放な娼婦という二極化が生まれたのだ²⁵⁾。したがって、国家＝男性（ことに軍隊）を性病から守るために売春を合法化し、売春婦を家庭婦人から切り離して管理すべきだというウィリアム・アクトンのような主張があらわれることにもなる²⁶⁾。あるいは、売春を防波堤にして「純潔な」女性を守る考え方といってもいいだろう²⁷⁾。けれども、こういった女性観には、性に関する二重規範があることも忘れてはならないだろう。すなわち、一方では女性に貞淑で道徳的、家庭的であることを要求しながらも、他方では男性の性的自由を許容しているのである。前述のアクトンの論理も、性病を一方的に売春婦の責任とすることによって、男性の性的自由を保証するものとなっているし、1839年に出版された『暴露された売春——道德矯正の手引き』という本は、そのじつ高級売春宿ガイドとなっている²⁸⁾。

ジュウエット＝ロビンソン事件を報道したベネットの筆にも、こういった性の政治学が見え隠れしている。エレンが墮落した原因は、誘惑すなわち婚外交渉である。そして、それまでいかに敬虔であろうと貞淑であろうと、一度「間違い」を犯した女性は、転落の一途をたどるしかない。家庭婦人になれようもなく、娼婦に身を落とす。現実には、売春を一時的な生活手段として結婚する者も多かったにもかかわらず²⁹⁾、想像上の娼婦像には転落の末の悲惨な死が待っている。これと同様の論理は、アイザック・クラーク・プレイがベネットの伝記中でエレンに言及したときにも用いられている³⁰⁾。これに対して、ロビンソンは売春宿に出入りしていたにもかかわらず、道徳的に責められることはない。実際、ベネットは彼を擁護するときに「道徳的にまったく申し分がない」とすら言っているのだ。しかも、ロビンソンは例外的な青年だったわけではない。彼の裁判は単なる殺人事件の裁判の域を越え、遊び人仲間が彼を支持するために詰めかけるという活況を呈している³¹⁾。また、ロビンソンの無罪を主張しはじめたベネットが、殺人方法が「女性的」であるとするにも、この種の二重規範が見られる。男性ロビンソンを擁護するためには、「家庭性」からはずれた売春宿の女将は恰好のスケープゴートとなりえるのである。

こうしてエレン・ジュウエット殺人事件を通じて性犯罪報道のノウハ

ウをつかんだ『ヘラルド』は、その5年後におきたメアリー・ロジャース殺人事件でも同様の報道態度をとることになる。

『ヘラルド』のメアリー・ロジャース殺害の第一報は8月3日に掲載されたものだが、この記事でメアリーの人物像が簡単に紹介されている。それによると、メアリーは「3年前には葉巻商アンダソンと同居」しており、この間2週間にわたって失踪したときは「海軍将校によって誘惑され、ホボケンに留めおかれたと言われている」。彼女の母親は、過去2年間、市内でそこそこの下宿屋を営んでいる。日曜日に親戚を訪問すると外出したメアリーは、前週の水曜日にホボケンで死体となって発見された。

ここでは、事件が性犯罪であることを臭わせるような書き方をされている。まず、メアリーがアンダソンと同居していたという事実はない。それどころか、男たちに囲まれた職業を心配する母親の強い主張によって、メアリーが日暮れに騒々しい街をひとりで歩くことがないように、アンダソンは彼女の帰宅を送っている³²⁾。けれども、この時代に「葉巻売りの娘」であることは、それだけで問題視された。美貌で男性客の歓心を買うことを目的としたこの職業は、「世間の悪に純潔をさらす向こう見ずで危険な行為」と考えられていたのである³³⁾。したがって、メアリーの貞操は死後になって問われることになる。以前の恋人で死体の身元確認にあたったアルフレッド・クロムリンの「最大の関心事は死んだ娘の評判を守ることであるようだった」³⁴⁾。検死にあたりチャード・クック医師は、メアリーが事件前「明らかに貞淑で品行方正な人物」であったと証言している³⁵⁾ (ウォレスはこの証言が「科学的というより感傷的」として疑念を呈しているが、貞操が問題視されること自体が問題であることを失念している³⁶⁾)。また、捜査にあたった警察官トマス・バーンズは45年後に書いた本のなかで、彼女の生前の「品行は慎み深い行儀作法の手本のようだった」と陳述している³⁷⁾。暴行のすえ殺害されたと考えられている娘の事件以前の貞操が問題となることには、「葉巻売りの娘」に対する偏見が見え隠れしている。家庭を守るべき女性が男の歓心を買う勤めをしているのだから、貞操であるはずがないというわけだ。

こういった貞操を問題にする態度は、8月3日の『ヘラルド』が海軍将校による誘惑を示唆しているところにも見られる。先のエレン・ジュウェット事件でも見たように、「誘惑をきっかけにした墮落の末の死」

という図式を描こうとしているのだ。母親が下宿屋を経営しているのも、この図式にはまる。実際、ウォレスは、この下宿屋でメアリー・ロジャースが客に「娯楽」を提供していた可能性を暗示している³⁸⁾。『ヘラルド』による事件の第一報は、メアリー・ロジャースを個人としてではなく、「葉巻売りの娘」というひとつの典型として書こうとしているのだ。

じつのところ、先のエレン・ジュウェット事件とこのメアリー・ロジャース事件の『ヘラルド』での報道の違いは、この典型化にある。前者にも「誘惑され堕落した女」という典型化が見られるが、それでもなおかつ彼女の場合には個人像が存在していた。彼女の趣味嗜好から読書傾向までが報道されているのだ。けれども、メアリーの場合、個人像が浮かび上がってこない（この傾向は、『ヘラルド』だけでなく他の報道にも見られる³⁹⁾）。8月9日の続報では捜査の膠着を嘆き、情報提供者に懸賞金を出すことまで申し出ているのだが、その論調はメアリーの事件を教訓に女性全般の安全を守る方策を考えようというものになっている。こういった事件が続けば、「たとえ夫や兄弟の保護下にあったとしても」女性には安全ではないとして、最近おきた女性暴行事件を羅列しているのだ⁴⁰⁾。もちろん、母親とふたりで下宿屋に暮らす「葉巻売りの娘」には、保護してくれる夫や兄弟がいるはずもない。

「葉巻売りの娘」という呼称自体にも、典型化の力学が働いている。メアリーの1838年の失踪事件のとき、『週刊ヘラルド』は男たちが出入りする葉巻売店に若い女性の売り子を置くことの危険性を説き、「若い娘は顧客が女性ばかりの店だけで働くべきだ」としている⁴¹⁾。また、1840年9月13日のニューヨーク「サンデー・モーニング・アトラス」は、図版つきで葉巻売りの娘を紹介し、この職業につきまとう危険性を指摘している。黒髪の美人が葉巻を差し出している木版画の図版は、殺人事件のあとでメアリー・ロジャースの肖像画として再登場することになった⁴²⁾。この図版がはたして本人をモデルにしたものかどうかは不明だが、この図版流用からもメアリーを「葉巻売りの娘」として典型化しようとする傾向が見えるだろう。あるいは、「葉巻売りの娘」という典型に、メアリー・ロジャースという名前が与えられたといってもいいだろう。

メアリーの死因の新説が無批判に受け入れられた背景にも、同様の典型化の力学がある。死体発見直後の検死が暴行と窒息を死因としているのにもかかわらず、翌年の11月に中絶失敗による死の可能性が出てくる

と、この説が広く信じられるようになる。事件直前にメアリーが「背が高く、色黒の男」と目撃されたフレデリカ・ロス夫人の経営の居酒屋「ニック・ムーアズ・ハウス」は、じつは墮胎医に提供された場所だというのだ⁴³⁾。この説によれば、検死はいい加減なもので信用できず（ことにメアリーの「純潔」を強調している箇所）、銃の暴発によって死の床にあるロス夫人が証言したとされる墮胎説は信用に足ることになる。

けれども、事件直前にメアリーがロス夫人の店に立ち寄ったことを証言しているのは夫人自身であり、しかもメアリーが身につけていたと思われる品々が店の近くの藪で発見されたあと、その服装の娘が来たように思うと証言しただけなのだ⁴⁴⁾（『ヘラルド』は、この花形証人を最大限に活用して、彼女の店の外観の絵を現場再現図と同じ扱いで掲載している）。同伴者とされた「色黒の男」は、懸命の探査にもかかわらず、発見されない。また、ロス夫人による墮胎説の証言には、何の根拠もない。死の床での証言を聞いたとされるホボケンの判事ギルバート・メリットは、この証言自体の存在を否定している⁴⁵⁾。

だが、問題はメアリーがはたしてロス夫人の店で中絶手術を受けたかどうかではない。問題は、メアリー墮胎説がまことしやかに流布したことなのだ。そして、この噂が信じられるようになった時代背景なのだ。

ジェイムズ・C・モアによれば、1820年代に禁止法案が検討し始められた中絶は、40年代初頭には社会問題化している⁴⁶⁾。家庭婦人たちが産児制限の手段として中絶を受けるようになり、ほとんど「流行」にまでなったのである。もちろん、上中流階級の非移民・白人・プロテスタントのアメリカ人の減少を招く行為が許されるわけがない（この時代はまた、白人の、男性の優越性を「科学的に」証明しようとした時代でもあった⁴⁷⁾）。こうして、墮胎医に非難が集中することになった。

この時期にはまた、産婆が産室から締め出され始めている。G・J・バーカー＝ベンフィールドによれば、この時期、出産を司る役割が女の産婆から男の産科医（そして婦人科医）へと移行した背景には、女の「性」と「体」を男の支配下に置く意図があった⁴⁸⁾。出産は個人的な体験ではなく、社会や国の基礎となる事業なのだ⁴⁹⁾。したがって、男の指導でなされなくてはならない。こうして、出産（あるいは出産中絶）に関する仕事にたずさわる産婆は駆逐されていくことになる。

こういった時代を背景に、墮胎医、ことに女の墮胎医は、非難の的と

なっていく。1847年3月13日の『ナショナル・ポリス・ガゼット』は、「女の墮胎医」と題する記事を掲載するが、この記事に付けられた図版は、女の墮胎医の肖像画の下でコウモリのように翼を広げた怪物が赤子を食べているというものだった。この肖像画のモデルになったと言われているのが、本名アン・ローマン、通称マダム・レステルである⁵⁰⁾。

マダム・レステルは30年代の終わりから「フィーメール・マンスリー・ピル」を売り出した。この薬と同種の月経不順治療薬の宣伝は、40年代半ばの新聞に多く掲載されている。たとえば「フレンチ・リノヴェイティング・ピル」には、「妊婦は流産の可能性があるので使用しないように」という注意書きが添えられている⁵¹⁾。もし薬の効能が充分でないときには、販売者のオフィスで個人的相談に応じるという仕掛けだ。マダム・レステルはこの商売で「赤子のされこうべの上に建てた大邸宅」を獲得したと批判された⁵²⁾。

そして、膠着状態になっていたメアリー・ロジャース事件に、マダム・レステルの名前が登場することになる。1842年には単に中絶の失敗による死という噂だったものが、1846年にはその中絶死をもたらしした医者者に具体的な名前が与えられたのだ。1845年11月8日に『ガゼット』に送られた匿名の手紙から始まったこの騒ぎは、翌年2月21日に同紙がマダム・レステルのメアリー・ロジャース殺害の可能性を示唆した記事を掲載したため、翌々日の抗議のデモへと発展した⁵³⁾。2月28日の同紙は、このデモ隊が「誰がメアリー・ロジャースを殺したんだ」と叫んだことを伝えている⁵⁴⁾。もちろん、メアリーとマダム・レステルを直接結びつける証拠はまったくない⁵⁵⁾。というよりは、1846年の中絶死亡説は『ガゼット』の話題作りと考えたほうがいいだろう⁵⁶⁾。当時の性の政治学を反映した女の墮胎医に対する非難が、メアリーの亡霊を呼び戻したのである。メアリー・ロジャース中絶死亡説をとっているウィムザット、サミュエル・コップ・ワーセン、ウォルシュは、この性の政治学を見落としたために、読み違いをしているといえよう。

ところで、このメアリー・ロジャース殺人事件をめぐる報道には、先に述べたエレン・ジュウエット殺人事件をめぐる報道と類似点が多い。第一に、被害者がそれぞれ「娼婦」「葉巻売りの娘」という典型に還元されていること。どちらの職業も男相手であるために、性的含蓄がつきまとう。あるいは、職業の持つ性的含蓄のために、個人の顔よりも典型

に注目が集まったといってもいいだろう。第二に、真犯人が逮捕されないこと。エレン殺害の容疑者ロビンソンは裁判の結果、無罪放免となる。メアリー殺害犯は、集団暴行魔か、「背の高い色黒の男」か、『ヘラルド』で報じられた海軍将校か、確定されないまま終わっている。いずれの場合にも最初の容疑者が男であるのは、被害者につきまとう性的含蓄と無関係ではない。第三に、真犯人の欠落を「性」に関する職業に従事している「怪し気な」女によって補償していること。エレンの場合はロジーナ。売春宿の女将というだけで充分に怪しい。メアリーの場合はマダム・レステル。アメリカ人の赤子を殺して富を築いた、イギリス移民の女の堕胎医だ。両者とも真犯人の空隙を埋めるのにふさわしいスケープゴートとなっている。エレンの場合にも、メアリーの場合にも、その殺人事件をめぐる報道には当時の政治学が反映されているのである。

III

こうして、メアリー・ロジャースをめぐる当時の報道における性の政治学があきらかになると、次にはそれが「マリー・ロジェの謎」にどのように反映しているかを見ていく必要があるだろう。この作品には、鉤括弧で囲われた「編集部」の中でポウ氏と呼ばれている語り手が語っている部分と、その語りのなかでデュパンが語っている部分とがある。事件をめぐる言説では、ポウ氏の語りは概観を、デュパンのそれは分析を担当している。

このうちポウ氏によるマリー・ロジェ殺人事件概観は、当時の報道によるメアリー・ロジャース殺人事件をほぼなぞったものとなっている。ふたり暮らしの母親が下宿屋を営んでいること、マリーが美貌を見こまれて「香水商」（メアリーの場合の「葉巻商」）の店頭に立って人気を博したこと、勤めている最中に一度目の失踪をして噂になったこと、二度目の失踪のあと他殺死体となって発見されたこと、事件に懸賞金が賭けられたにもかかわらず犯人が発見されないこと、何人かの容疑者の取り調べは証拠不足に終わったこと。ここで注目したいのは、このポウ氏による概観が単に事件の進展を追っているだけでなく、当時の報道姿勢までも写しとっていることである。「葉巻売りの娘」が性的連想を喚起したように、「香水売りの娘」も「感受性の強いパリの人々の心に強烈な興奮をひきおこした」（726）のだ（パリという街自体からも性的な連想が働く

ことは、当時の墮胎医がフランス風を装っていたことからわかる57)。

もちろん、こういったポウ氏による概観が当時の報道姿勢を写しとったものになることに不思議はない。というのも、ポウ氏とデュパンはこの事件の騒ぎのときでさえ「周囲の退屈な世界を夢のなかに織りこんで」(724) 暮らしていたので、事件は総監の依頼のあとで新聞記事によって再構成されたものとなっているからだ。ポウ氏の概観は新聞記事だけでなく、その報道態度も忠実に再現したものとなっているのである。したがって、ポウ氏の事件概観は、より具体的なものになってくると、翻訳の体裁をした新聞記事の引用によってかわられることになる。

これに対してデュパンの語りは、新聞記事の批判的分析で始まる。実際、マリー・ロジェ殺人事件とモルグ街の殺人事件の比較のあとでデュパンが一番先にしていることは、新聞批判となっている。「心しておかなくてはならないことは、たいていの場合、新聞の目的はセンセーションをひきおこすこと——面白味を作りだすこと——が主で、真実を追求することではないということだ」(738)。ポウ氏が事件報道を忠実に、したがって無批判に再現しているのに対して、デュパンは同じ事件報道を批判的に分析し、また解説しているといえよう。

デュパンの新聞批判は、死体の身元の問題にあらわれる。「^{エクス・バルテ}偏 頗」(740) と非難されるのは、死体別人説を主張している新聞記事だ。この他殺死体は「あらゆる経験の示すところ」(732) によって、「貞操にむけられた嫌疑にかかわる理由」(733) で街を離れたマリーとは別人とされる。この記事に見られるのは、またしても典型化だ。死体は水中での浮沈にかかる時間に関する一般論によって処理され、マリーの姿は「香水売りの娘」という典型に置き換えられている。死体とマリーの分裂は、それぞれの典型化によって正当化されているのである。したがって、デュパンの反駁は、死体の詳細をとりあげてマリー本人の特徴とつきあわせる「身元確認の問題」(748) となる。

このことはまた、マリーに肉体をとり戻すことでもある。「香水売りの娘」の典型に置き換えられ実体から離れたマリーという名前に、肉体の詳細・特徴が付け加えられ、文字通り「肉付け」されていくのだ。けれども、皮肉なことに、マリーに戻された肉体はすでに死んでいる。というのも、第一にとり戻された肉体自体が死体であるからであり、第二にこの「肉付け」も新聞記事という二次資料によるものであって、生の

事実や情報によったものではないからであり、第三に「肉付け」に使われた記事のなかでもマリーはすでに典型のなかに「消されて」いるからである。

こうして、肉体を獲得したマリーは死体へと還元される。しかも、解剖が可能ならばかりでなく必要な他殺死体として。したがって、デュパンが「マリー・ロジェの謎」の後半で行っているのは、この他殺死体の検死だ。死体が解剖され、状況証拠が提出され、現場が検証され、犯行が再現される。これが、デュパンの言う「この惨劇の内部の問題点を放棄して、その外郭に注意を集中する」(751) ことなのだ。こうして、集団暴行魔説が否定され、「背の高い色黒の男」＝海軍将校説が浮上する。現場遺留品が偽物と認定され、単独犯説が提出される。そこには、もう「生きた」マリーは存在していない。マリーの「内部」は話題の「外郭」へと押しやられ、犯行の「外郭」が話題の中心となっている。そこに存在しているのは、解剖された他殺死体と犯人「像」(犯人が逮捕されることはない)なのである。

この意味で、デュパンもまたマリー殺害の犯人と言えらるだろう。姿を見せない真犯人に殺されたマリーは、「香水売りの娘」という典型を当てはめようとする新聞報道によって消された上に、その新聞報道を基に検死をするデュパンによって解剖され「外郭」に押しやられる。デュパンは、彼の推理した真犯人像と同様に、マリー(の死体)に解剖という暴行を加えた末に、その死体を「外郭」に捨て去っているのである。「盗まれた手紙」でのデュパンと犯人D——大臣との同一性の指摘⁵⁸⁾を待つまでもなく、「マリー・ロジェの謎」でのデュパンも犯人と同じ動きをしているのだ。したがって、デュパンのフル・ネームがC・オーギュスト・デュパンであるのも意味のないことではない。頭文字を連ねればCAD、卑劣漢となるではないか⁵⁹⁾。

IV

ところで、天才探偵とその凡庸な友人という組み合わせがその後多くの後継者(有名なものでは、ホームズとワトソン、ボワロとヘイスティングス)を生んだことは周知の事実だが、「マリー・ロジェの謎」でのデュパンとポウ氏の関係は、他のデュパン物での関係とは違ったものとなっている。というのも、「モルグ街の殺人」「盗まれた手紙」がデュパンが警句

を引用することで終わっているのに対して、「マリー・ロジェの謎」ではデュパンが語り終えたあとも、ポウ氏が語りつづけているからだ。前二者が探偵の天才を証明した形で終わっているのに対して、後者では天才の証明は凡庸な友人の語りに枠付けられているのである。

この枠付け形式は、二人の力関係を微妙に変える。確かに、「マリー・ロジェの謎」でも、語られている内容だけをとってみれば、デュパンの優位は否定しがたい。「盗まれた手紙」で証明されているように⁶⁰⁾「知は力なり」という法則は、この作品でも有効となっている。ポウ氏による事件概要という「読み」が当時の事件報道を忠実に無批判になぞっているのに対して、デュパンの批判的分析はポウ氏の読みについての読みとなっているからだ。ここでの力関係は、内枠のポウ氏に対する外枠のデュパンという図式にあらわれている。けれども、このデュパンの読み（と語り）が同じポウ氏の語りのなかに設定されているという語りの形式が、この力関係を逆転させる。デュパンの読みと語りは、ポウ氏の「暗合」についての序言と結語によって条件付けられているのである。ポウ氏の内枠にかかったデュパンの外枠は、そのまた外からポウ氏の枠をかけられ、知としての力は枠構造の一番外に位置しているポウ氏の手のなかに移行することになる。

この枠構造は、デュパンの推理あるいは読みを「実話」から切り離す。外枠のポウ氏の語りが「暗合」を言い立てることによって、そしてその外枠に囲い込まれていることによって、デュパンの推理は自律し閉じた空間を形作ることになる。あるいは、外枠のポウ氏の語りが緩衝材となって、内枠のデュパンの語りを現実の事件との直接の接触を絶っているといってもいいだろう。このことはまた、デュパンがポウ氏のバリの部屋に囲い込まれ現実との接触を絶っていることとも符合する。

したがって、デュパンが現実のメアリー・ロジャース事件を解決したというのは、見せかけにすぎない。彼が解決したのは新聞記事を基にしたマリー・ロジェ事件であり、しかもその解決もマリーの死体解剖と犯人「像」の指摘に終わっている。さらには、この作品の著者ポウが現実のメアリー・ロジャース事件を解決したということには、大きな嘘がある。著者ポウは、語りの枠構造や注釈を含めて、メアリー・ロジャース事件とマリー・ロジェ事件の現実と虚構の関係を一筋縄ではいかないように仕組んだ張本人であり、デュパンと語り手ポウ氏もまた彼の創造物

にすぎないからだ。

「マリー・ロジェの謎」が推理小説としてあまり高い評価を受けていない原因の一つは、デュパンと著者ポウとの混同、そして語り手ポウ氏の不当な無視にある。けれども、本稿で見てきたように、「マリー・ロジェの謎」におけるデュパンの位置が決定されれば、著者ポウとの違いも明らかになろうし、語り手ポウ氏の役割も定義されよう。だとすれば、「マリー・ロジェの謎」全体の「語り」は、著者ポウが読者に対して仕かけた「かたり」だと解釈することも可能だろう。ポウはこの作品のなかで意図的にメアリー・ロジャース事件とマリー・ロジェ事件の関係を複雑なものにし、読者に対してトリックを仕掛けているのである。この意味で、ポウの正当な後継者はG・K・チェスタトン一人だとするリチャード・ウィルバーの指摘は、正しい⁶¹⁾。

NOTES

- 1) *Collected Works of Edgar Allan Poe*, ed. Thomas Ollive Mabbott (Cambridge: Belknap P, 1978).
- 2) Howard Haycraft, *Murder for Pleasure: The Life and Times of the Detective Story* (New York: Appleton-Century, 1941), 16.
- 3) Ffrangcon C. Lewis, "Unravelling a Web: Writer versus Reader in Edgar Allan Poe's Tales of Detection," in Ian A. Bell and Graham Daldry (eds.), *Watching the Detectives: Essays on Crime Fiction* (Houdmills: Macmillan, 1990).
- 4) Dorothy Sayers, Introduction to *The Omnibus of Crime* (New York: Payson and Clark, 1929); Richard P. Benton, "The Mystery of Marie Rogêt—A Defense," *Studies in Short Fiction* 6. 2 (Winter 1969).
- 5) William Kurtz Wimsatt, Jr., "Poe and the Mystery of Mary Rogers," *PMLA* 56 (March 1941): 230-48. See also: Samuel Copp Worthen, "Poe and the Beautiful Cigar Girl," *American Literature* 20 (Nov 1948): 305-12; Wimsatt, "Mary Rogers, John Anderson, and Others," *American Literature* 21 (Jan 1950): 482-84.
- 6) John Walsh, *Poe the Detective: The Curious Circumstances Behind "The Mystery of Marie Rogêt"* (New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1967).
- 7) Irving Wallace, *The Fabulous Originals: Lives of Extraordinary People Who Inspired Memorable Characters in Fiction* (New York: Alfred A. Knopf, 1955).
- 8) Raymond Paul, *Who Murdered Mary Rogers?* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice

- Hall, 1971).
- 9) Walsh, 61-73.
 - 10) Paul, 115-21.
 - 11) Walsh, 72-73.
 - 12) Mabbott, 788.
 - 13) Wimsatt (1941).
 - 14) Frank Luther Mott, *American Journalism: A History: 1690-1960* (New York: Macmillan, 1962), 215-52; James L. Grouthamel, "The Newspaper Revolution in New York: 1830-1860," *New York History* 45 (1964): 91-113.
 - 15) David Ray Papke, *Framing the Criminal: Crime, Cultural Work and the Loss of Critical Perspective, 1830-1900* (Hamden: Archon Books, 1987), 33-53.
 - 16) Dan Schiller, *Objectivity and the News: The Public and the Rise of Commercial Journalism* (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1981), 47.
 - 17) Richard O'Connor, *The Scandalous Mr. Bennett* (Garden City: Doubleday, 1962), 20; James L. Crouthamel, *Bennett's New York Herald and the Rise of the Popular Press* (Syracuse, NY: Syracuse UP, 1989), 30.
 - 18) O' Connor, 20.
 - 19) *New York Herald*, 10-16 April 1841; Crouthamel, 28-31; Oliver Carlson, *The Man Who Made News: James Gordon Bennett* (New York: Duell, Sloan and Pearce, 1942), 143-67.
 - 20) Carlson, 149.
 - 21) Crouthamel, 30; Carlson, 161.
 - 22) Timothy J. Gilfoyle, *City of Eros: New York City, Prostitution, and the Commercialization of Sex, 1790-1920* (New York: Norton, 1992), 92-116; Christine Stansell, *City of Woman: Sex and Class in New York, 1789-1860* (New York: Alfred A. Knopf, 1986): 89-101.
 - 23) Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835* (New Haven: Yale UP, 1977). See also: Barbara Welter, "The Cult of True Womanhood: 1820-1860," *American Quarterly* 18 (Summer 1966): 151-74; G. J. Barker-Benfield, *The Horrors of the Half-Known Life: Male Attitudes Toward Women and Sexuality in Nineteenth-Century America* (New York: Harper & Row, 1976); Barbara Leslie Epstein, *The Politics of Domesticity: Women, Evangelism, and Temperance in Nineteenth-Century America* (Middleton: Wesleyan UP, 1981); Carroll Smith-Rosenberg, *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America* (Oxford: Oxford UP, 1985);

Stansell.

- 24) Carroll Smith-Rosenberg and Charles Rosenberg, "The Female Animal: Medical and Biological Views of Woman and Her Role in Nineteenth-Century America," *The Journal of American History* 60 (Sep 1973): 332-56; Charles E. Rosenberg, "The Bitter Fruit: Heredity, Disease and Social Thought in Nineteenth-Century America," *Perspectives in American History* 8 (1974): 189-235; Laurel Thatcher Ulrich, "Vertuous Women Found: New England Ministerial Literature, 1668-1735," *American Quarterly* 28 (Spring 1976): 20-40; William G. Shade, "'A Mental Passion': Female Sexuality in Victorian America," *International Journal of Women's Studies* 1 (Jan-Feb 1978): 13-29; Cott, "Passionless: An Interpretation of Victorian Sexual Ideology, 1790-1850," *Signs* 4.2 (Winter 1978): 219-36.
- 25) Milton Rugoff, *Prudery and Passion: Sexuality in Victorian America* (New York: G. P. Putnam, 1971); Kathleen Barry, *Female Sexual Slavery* (New York: New York UP, 1979); Judith R. Walkowitz, *Prostitution and Victorian Society: Women, Class, and the State* (Cambridge: Cambridge UP, 1980); Ruth Rosen, *The Lost Sisterhood: Prostitution in America, 1900-1918* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1982); Lena Dominelli, "The Power of the Powerless: Prostitution and the Reinforcement of Submissive Femininity," *The Sociological Review* 34.1 (Feb 1986): 65-92; Stansell; Gilfoyle, "Strumpets and Misogynists: Brothel 'Riots' and the Transformation of Prostitution in Antebellum New York City," *New York History* 68.1 (Jan 1987): 44-65; Gilfoyle, "The Urban Geography of Commercial Sex: Prostitution in New York City, 1790-1860," *Journal of Urban History* 13.4 (Aug 1987): 371-93; Barbara Meil Hobson, *Uneasy Virtue: The Politics of Prostitution and the American Reform Tradition* (New York: Basic Books, 1987); John D'Emilio and Estelle B. Freedman, *Intimate Matters: A History of Sexuality in America* (New York: Harper & Row, 1988); Gilfoyle (1992).
- 26) William Acton, *Prostitution Considered in Its Moral, Social and Sanitary Aspects* (1857; London: Frank Cass, 1972).
- 27) D'Emilio and Freedman, 133.
- 28) Butt Ender [nom de plume], *Prostitution Exposed; or a Moral Reform Directory, Laying Bare the Lives, Histories, Residences, Seductions, & c. of the Most Celebrated Courtezans and Ladies of Pleasure of the City of New-York, Together with a Description of the Crimes and its Effects, as also, of the Houses of Prostitu-*

- tion and their Keepers, Houses of Assignment, Their Chages and Conveniences, and Other Particulars Interesting to the Public* (New York: n. p., 1839); mentioned in Gilfoyle (1992), 131.
- 29) William W. Sanger, *The History of Prostitution: Its Extent, Causes and Effects Throughout the World* (New York: Medical Publishing, 1919).
 - 30) Isaac Clarke Pray, *Memoirs of James Gordon Bennett* (1855; New York: Arno and the New York Times, 1970), 209-10.
 - 31) Gilfoyle, 98.
 - 32) Wallace, 186; Paul, 21.
 - 33) Walsh, 10.
 - 34) Paul, 34.
 - 35) *Herald*, 17 August 1841.
 - 36) Wallace, 186-87. See also Wimsatt (1941).
 - 37) Thomas Byrnes, *Professional Criminals of America* (1886; New York: Chelsea House Publishers, 1969), 345.
 - 38) Wallace, 214.
 - 39) Wallace, 184.
 - 40) *Herald*, 9 August 1841.
 - 41) Walsh, 13.
 - 42) Mabbott, 716.
 - 43) Walsh, 51-58. See also: Wimsatt (1941), Worthen and Wimsatt (1950).
 - 44) Paul, 64-73.
 - 45) Paul, 101-2.
 - 46) James C. Mohr, *Abortion in America: The Origins and Evolution of National Policy* (Oxford: Oxford UP, 1978).
 - 47) John S. Haller and Robin M. Haller, *The Physician and Sexuality in Victorian America* (Urbana: U of Illinois P, 1974); Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood* (Cambridge: Harvard UP, 1989).
 - 48) G. J. Barker-Benfield, *The Horrors of the Half-Known Life: Male Attitudes Toward Women and Sexuality in Nineteenth-Century America* (New York: Harper & Row, 1976).
 - 49) Paula A. Treichler, "Feminism, Medicine, and the Meaning of Childbirth," in Mary Jacobus, Evelyn Fox Keller and Sally Shuttleworth (eds.), *Body/Politics: Women and the Discourses of Science* (New York: Routledge, 1990): 111-38.

- 50) Clifford Browder, *The Wickedest Woman in New York: Madame Restell, the Abortionist* (Hamden: Archon Books, 1988).
- 51) Mohr, 57.
- 52) Edward Van Every, "The Mansion Built on Baby Skulls: Why Madame Restell Added Her Own Life to the Many She Had Taken," *Sins of New York: As "Exposed" By the Police Gazette* (1930; New York: Benjamin Blom, 1972).
- 53) Browder, 57-65.
- 54) Van Every, 99.
- 55) Wallace, 198.
- 56) Paul, 127.
- 57) Mohr, 54-57.
- 58) Barbara Johnson, "The Frame of Reference: Poe, Lacan, Derrida," in "Literature and Psychoanalysis: The Question of Reading—otherwise," *Yale French Studies* 55-56 (1977): 457-505; David Ketterer, *The Rationale of Deception in Poe* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1979).
- 59) Cf. Louis A. Renza, "Poe's Secret Autobiography," in Walter Benn Michaels and Donald E. Pease, *The American Renaissance Reconsidered* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1985).
- 60) Lewis, 111. See also Johnson.
- 61) Richard Wilbur, "The Poe Mystery Case," *Responses: Prose Pieces: 1953-1976* (New York: Harcourt Brace Javanovich, 1976), 133. See also Lewis.